



Title	近世・近代日本における孔子祭祀：湯島聖堂の近世近代
Author(s)	町, 泉寿郎
Citation	懐徳堂研究. 2023, 14, p. 3-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94538
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本易学連合会主催・二松学舎大学日本漢学研究センター共催
シンポジウム「孔子を祭る―日本における孔子祭典―」

近世・近代日本における孔子祭祀

―湯島聖堂の近世近代―

町 泉寿郎

一 緒言

報告者は令和三年（二〇二一）十一月、懷徳堂記念会
秋季特別講座において「湯島聖堂と漢学の近世近代」を
発表する機会に恵まれた。国指定の史跡湯島聖堂の歴史
を繙き、特に近代以降の変遷について重点を置いて湯島
聖堂を通して近世近代における漢学の断絶と連続を略述
した。湯島聖堂は言うまでもなく孔子祭祀（釈奠）のた
めの施設であり、本年は儒教の始祖孔子（紀元前五五
二―四七九）の歿後二千五百年の記念すべき年に当た
る。そこで今回は孔子祭祀に焦点を当てて近世近代にお
ける漢学について概観したい。

二 中国の釈奠

中国において先聖・先師を祭る釈奠は長い歴史を有す
る。伊藤東涯の名著『制度通』巻十一の「釈奠」の記載
を主な材料として、その沿革を見ておこう。『礼記』の
文王世子第八に、「凡そ学、春は官、其の先師に釈奠し、
秋冬も亦たかくの如くす。凡そ始めて学を立つる者は、
必ず先聖・先師に釈奠す（原漢文）」という規定がある。
釈奠とは、祭祀の際に供物を置くことに由来する名称で、
釈も奠も供物を「置く」ことを意味する。「先聖」と
は周公旦もしくは孔子のことを指すとその注に見えて
いる。

漢代を通じて儒教の国教化にともない孔子に対する敬

重の度が加わり孔子の子孫にも爵禄を賜ったが、孔子祭祀はその故郷である魯の曲阜で執り行われており、国家の中央教育機関において孔子が積奠の祭祀対象となることは漢代にはなかった。ついで魏の齊王（少帝、在位二三九―二五四）の代、正始二年（二四一）二月に『論語』を通読し、太常の役人を派遣して都洛陽の太学内の辟雍において太牢の礼（牛・羊・豕を供える祭祀）を以て孔子を祀り、併せて高弟顔回を孔子に配享した（『三国志』魏書四）。

太牢の礼を以て行われる積奠は、供物として生贄を捧げる大規模で鄭重な祭祀であり、そこまで大規模な準備をせず犠牲や幣帛を省略し野菜を供える祭祀は「積菜」と呼ばれた。中国と日本では食習慣が異なり、また生贄を捧げることも仏教信仰等の理由から好まれなかったもので、犠牲も鹿・豕・兎に代えたり、鯉鮒に代えて行われた。或いは、積奠と呼んでも実際には積菜による場合が多かったようである。積奠が執行される日取りは、『礼記』月令の規定によれば、仲春の上丁の日とあるが、隋・煬帝の時のように四季の仲月の上丁の日に行った時期もあった。その後、唐代に更に規定が整備され、春秋二仲、旧暦の二月と八月の上丁の日に行われてきた。

唐代には孔子への追贈が続き、孔子が聖人として祀ら

れるようになっていった。太宗の貞観二年（六二八）に房玄齡らの議によって先聖として周公旦を祀ることを止め、孔子を先聖として祀り顔回を配享することに改めた。同十四年（六四〇）には国子学に太宗が行幸して積奠に臨んだ。同二十一年（六四七）には孔子廟に先師として歴代の経学者二十二人（左丘明、卜子夏、公羊高、穀梁赤、伏勝、高堂生、戴聖、毛萇、孔安国、劉向、鄭衆、杜子春、馬融、盧植、鄭玄、服虔、何休、王肅、杜元凱、范甯、賈逵）を配享した。これが孔子廟に諸儒を従祀する始まりである。

更に玄宗の開元二十七年（七三九）にはそれまで尼父や宣父と呼ばれていた孔子に文宣王が追諡される。開元年間（七一二―七四二）に孔門の高弟七十人（七十弟子）の画像を描いてこれを前述の二十二賢の上位に据えて従祀した。また孔子の子孫が嗣文宣王に封じられ、主要な高弟（十哲）にも公侯伯の爵位が追贈された。

宋代以降は孔子の尊重が更に進んで至聖文宣王となり（二〇〇二年）、元代には大成至聖文宣王となった（一三〇七年）。また孟子が合祀されるようになった（一〇八四年）。明代には従祀される範囲が更に広がり、漢唐の儒家のみならず、宋学諸儒から明代の薛敬軒・陳白沙・王陽明らまでが従祀されるようになる。積奠の祭祀対象

は、その時々儒学思潮を如実に反映することになったのである。

三 日本古代の積奠

日本で積奠が行われた記録が残るのは、文武天皇の大
宝元年（七〇一）二月丁巳の日に行われたのが最初で、
『続日本紀』にその記録が見られる。

その後、二度にわたって入唐した吉備真備（六九五？―
七七五）が積奠の整備に功績があったとされる。唐・玄
宗の七三二年に「開元礼」が制定されており、その中に
積奠の規定（卷五十四、国子積奠於孔宣父）があること
から、これを持ち帰った吉備真備がこの規程を参照して
積奠の儀式を行ったと考えられている。^③これによって同
時代中国の積奠がかなり正確に日本に伝えられることにな
った。

八世紀半ばに整備された積奠には、称徳天皇が神護景
雲元年（七六七）二月に大学に行幸して積奠を行わせて
いる（『続日本紀』卷二十八）。更に吉備真備が副使を務
めた天平勝宝中の遣唐使に加わった経験を持つ大学助教
膳大丘が、神護景雲二年（七六八）七月に唐で孔子が文
宣王と称されているのに倣って日本でも孔子の呼称を改

めるべきであると奏上し、これが容れられて日本でも文
宣王と称されるようになる（『続日本紀』卷二十九）。し
かしながら、この時期を例外として、文宣王となり「南
面」する地位に昇った孔子廟に天皇が行幸してこれを拝
することはその後なかったようである。ここに、中国と
日本における王権と儒教の関係の相違を見出すことがで
きる。

その後、十世紀初頭の『延喜式』卷二十「大学寮」に
も日本に定着した形の積奠の様子が見ることができ
る。祭祀対象は、先聖文宣王と先師顔回に、九哲を配享（要
するに孔子と十哲）。先聖・先師に奏上する祝文は漢音
で音読された。積奠の儀式は、「陳設」といって廟堂に
孔子像を祀って祭器に供物を盛って献饌することや、「饋
享」といって幣帛を捧げたり、祝詞を奏上したり、神酒
を飲んだり、供物を捧げて、それを一緒にいただくといっ
た一連の祭祀が儀式の中心になる。その後に、「講論」と
いって儒教經典の講義や論議が行われ、更に酒食を伴
う「百度座」「宴座」からなる。時代が進んで平安朝に
なると、「陳設」「饋享」といった供物を盛ったりそれを
分配するといった祭祀部分が簡略化されていき、本来は
付属的なものであった宴の部分が肥大化して宴の場で作
る詩文などに重点が移っていった。^④その他、「晴儀」と

「雨儀」といって、当日の天候によって本式・略式に行わる規定もあった。

四 江戸時代の枳奠―湯島聖堂そのほか

次に、江戸時代の枳奠に移る。林羅山（一五八三―一六五七）が不忍池畔の忍岡に幕府から下賜された別邸に、尾張藩の初代徳川義直が孔子像を寄進して、寛永九年（一六三二）にここに孔子廟が創設された。これが後の湯島聖堂の起源であり、翌年（一六三三）に三代将軍家光がこれに礼拝したことが聖堂官立化の淵源となる。天皇の場合には容易ではない孔子廟参拝が、將軍の場合には容易に実現する。林家家塾の員長を務めた大塚印南の『昌平志』（『日本教育文庫』に活字所収）はよく知られた資料であるが、国会図書館所蔵写本は挿図が豊富で、寛永年間の忍岡の林家別邸の様子を描きその中には孔子廟もある。この絵のように、当時はまだ小さな施設に過ぎなかったと思われる。但し林鷲峰（一六一八―一六八〇）によれば、徳川義直は『三才図会』宮室に所収の黄帝合宮図に倣って建設したと言うが、『昌平志』の挿図はこれを反映しているようには見えない。

この時期に、林羅山が狩野山雪に描かせた二十一幅か

らなる聖賢画像は、その原画が筑波大学に残っている。二十一人の聖賢大儒とは、次の通りである。

（三皇）伏羲、神農、黄帝

（聖帝）堯、舜、禹、湯王、文王、武王、周公、孔子

（四配）顔回、曾参、子思、孟子

（六大儒）邵康節、程伊川、周敦頤、程明道、張載、

朱熹

孔子の周囲に従祀される四配は、それぞれ従祀され始める時期がまちまちで、顔回が上述のように魏・正始二年（二四一）、曾参が唐・太極元年（七二二）、孟子が上述のように北宋・元七年（一〇八四）、子思が南宋・咸淳三年（一二六七）のことである。四配がセットで従祀されるようになったのは、明・嘉靖九年（一五三〇）にこの四者の封号を改めて復聖顔回・宗聖曾参・述聖子思・亜聖孟子という同格の「聖」に列せられた時に始まるようである。羅山はこの時に描かせた二十一幅の中から、四配に加えて宋代の大儒たち六人を聖堂（先聖殿）の中に従祀した。このことは羅山が朱子学に結実する宋代の学問を重んじていたことをよく示すものと言える。

二代林鷲峰は徳川幕府の立場から見た通史『本朝通鑑』を完成させ、寛文十年（一六七〇）にこれが完成した奉告祭として枳奠を挙行了た際、『庚戌枳菜記』をま

とめている。この歴史書の完成は林家の幕府儒官中における地位確立の契機となったが、枳奠においても同書の編纂事業が画期になったことがわかる。『庚戌枳実記』は国立公文書館に残っており、祭祀対象としては中央の聖像とあるところが孔子の座で、左右に四配、それから右に紹介した宋代の六大儒を祀る形であったことが確認できる。孔子と四配と六大儒が殿内に従祀されるという形が、湯島聖堂ではその後長く引き継がれていく。

その後、元禄三年（一六九〇）に五代將軍綱吉は忍岡の孔子廟を改めて、新たに湯島に孔子廟を建設する。忍岡の林家別荘は、江戸鎮護のために創建された東叡山寛永寺の何十万坪もの広い境内の南端に位置する五千坪余りの土地であったことから、そのような寺域の隅で孔子を祀る形では幕府の儒教尊崇の意図を広く一般に示すに十分でないと判断され、新たな場所に聖堂を建設し幕府直轄とすることとなった。これが現在まで残る湯島聖堂である。

それから約百年後の寛政十一年（一七九九）に、聖堂の傍らにあった林家家塾を拡張して、昌平坂学問所という幕府直轄の漢学教育機関が開設される。元禄中には幕府直轄の聖堂（孔子廟）であったものが、その百年後に直轄の学問所となって更に規模が拡大する。寛政の改革

の一環として昌平坂学問所が開設されると、新たに岩村藩大給家から出て林家を継いだ林述斎（一七六八―一八四一）のもとで、枳奠もさらに整備が進められた。寛政十二年中秋の「枳奠記」にはかなり詳細な式次第が記録されている^⑦。また林述斎のもとで作られた昌平坂学問所に関する記録である『昌平学分類雑載』（尊経閣文庫所蔵）には、枳奠の執行に関する極めて詳細な規定が残されている。儀式を継続的に実施していく場合に、様々なイレギュラーなケースが発生することが想定される。例えば天皇が崩御した年は延期するのか、水戸徳川公が亡くなった場合にはどうするか、近くで火事があった場合にはどうするか等々、さまざまなケースに応じて、前例が参照されて細かな規定が定められている。

『昌平学分類雑載』の内容上の特徴としては、幕府直轄学校の権威化という問題と密接に関係して、孔子祭祀儀礼「枳実」執行に関する記録が巻頭に置かれ、かつ分量的にも多く、重視されていることが分かる。幕府に提出する枳実の執行何には、決まって「上ヲ奉祝」の語が使用され、林大学頭にとって湯島聖堂の枳実が將軍の善政を称賛する意味合いを持つものであったことに改めて気付かされる。

特に述斎が寛政五年に林家養子となり大学頭を継承し

て以降の積業記録は精彩があり、述斎の並々ならぬ熱意と、幕府文教の柄を乗る能吏の素質を伝えている。このころ聖堂は天明の大火によって焼失しており、その再建は寛政十一年のことであり、聖像は災害時に当番大名が厨子ごと搬出する慣例であつたから問題ないものの、祭器類も焼失して俄か拵えの「仮仕切」の場所で「略式積業」を執行するのが精一杯であつた。不十分な施設であつても寛政八年秋の「略式積業」は、学問所学における学問奨励策が浸透しつつあり、晴天にも恵まれて、出席者からの寄附が大幅に増えた。同年春の積業に銀二両（百二十匁）寄附した者が、秋の積業の寄付金は金百匁（二分）に増額したなどと記しているのが、時勢の変化を感じさせる。

ところで、祭祀対象の様式には、中国と日本で微妙な違いがあつた。中国においては明・嘉靖九年（一五三〇）に従来の塑像から木主と呼ばれる木製の位牌のような形式に変えられていく。また孔子像を祀る場合でも、中国では概ね立像が多いが、日本では仏像を作る仏師たちが作ることもあつて座像が多い。⁹⁾ 古い歴史を持つ足利学校や、湯島聖堂、閑谷学校、佐賀県の多久聖廟などはのちのちまで座像を採用して行われた。しかし後に諸藩に開設された藩校などでは木主を用いる施設も少なくなかつた。

五 明治以降の湯島聖堂

次に明治以降の湯島聖堂について述べておこう。明治新政府に接収された湯島聖堂と昌平坂学問所は、文部省の管轄下に入り、学問所を改めてここに大学が置かれる。しかしながら、新たに加入した国学者と従来の漢学者との間に、祭祀対象をめぐるいわゆる「学神祭論争」を惹起する。国学者たちは天皇親政の世となり神道の權威が高まり、神道の神（八意思兼命）を新しく祀ると言い、それと従来の孔子の祭りを支持する漢学者の対立が深刻化し、これが原因となつて大学自体が休校（さらに廃止）になつてしまう。¹⁰⁾

休校になる直前、明治三年（一八七〇）五月に、大学に明治天皇が行幸する計画が持ち上がったことがあり、諸大臣たちも参列する計画が立てられた。その行幸が計画された時、昌平坂学問所教授の生き残りで大学の中博士を務めていた芳野金陵（一八〇三～一八七八）らが「大学御臨幸御次第取調」を命じられて式次第を立案している。その時に作成された文書によれば、天皇行幸の際に積奠を行い、和漢学者がそれぞれ和漢書を講義し、詩会を開く計画が立てられていた。天皇親政の時代を迎え

て、一千百年ぶりに再び天皇が釈奠に臨むかと思われたが、行幸自体が中止され釈奠も実施されずに終わった。かくて、その後約四十年に亘って湯島聖堂の釈奠は途絶することとなった。

湯島聖堂以外にも、各藩校など幕藩権力による官立学校の中には孔子祭祀を行っていた施設は少なくなかったが、明治以降は公教育機関における宗教行事が基本的に禁止されることとなり、孔子祭祀は日本中から急速に姿を消していったと考えられる。その一方で、天皇と国民の君臣関係を紐帯とする国家形成が進められ、御真影への崇拜が義務付けられてもいったのである。明治新体制のもとで、江戸時代を通じて浸透した儒教は打倒され断絶したというよりは、新しく組み替えられていく部分があり、儒教倫理は形を変えつつ存続していくのに比べて、孔子祭祀という儒教が古くから持つ宗教性の部分は急速に廃れていった。湯島聖堂は図書館や博物館のような陳列・収蔵施設として利用され、孔子祭祀は一度も行われなかった。約四十年後の孔子祭復活までの間、基本的に権力者が主催し参加するような公的な孔子祭は行われなかったと考えられる。

ところが、日露戦争後の明治三十九年（一九〇六）に東京高等師範学校の教職員の中から湯島聖堂における孔

子祭（釈奠）復活を求める声上がり、同年末から翌年（一九〇七）初めに東京高等師範学校の嘉納治五郎校長の主導によって孔子祭典会が結成され、湯島聖堂における孔子祭祀が復活する。その第一回は明治四十年四月二十八日に開催された。ただしそれは儒教の宗教行事としての釈奠ではなく、「日本における儒教の普及を孔子に感謝する祭り」という意義付けの孔子祭典として復活するのである。従来から釈奠の儀式として行われてきた供物を捧げるなどの形式が全く廃止されたわけではないが、祭祀の意味付けが大きく変わったと言える。

次いで、今から百年ほど前のことになるが、大正中期、第一次世界大戦中の大正七年（一九一八）に、孔子祭典会は、明治十年代に発足した財団法人斯文学会や、研究会、東亜學術研究会、漢文学会といった中国古典研究・漢文教育に関する諸団体とともに統合されて財団法人斯文学会が新たに開設され、湯島聖堂における孔子祭祀も斯文学会によって継承されて今日に至る。

六 孔子歿後二千四百年記念式典

1 日本各地の孔子二千四百年記念式典

斯文学会が創設されて四年後の一九二二年、今からちょ

うど百年前、孔子歿後二千四百年を記念した大きな式典が湯島聖堂で挙行された。湯島聖堂だけでなく全国各地の団体で行われているので、これらを開催順に拾ってみよう。

佐賀県の多久聖廟では、四月十一日に開かれ、その頃に新設された旧制佐賀高等学校の生駒萬治校長が講話を行っている。

鹿児島では、元旦に渡部董之介七高校長が新聞に孔子祭典会発足の希望を述べ、三月に第七高等学校造士館内に孔子祭典会が設けられ、漢文科の教授を長年務めた山田準（山田方谷養孫、三島中洲門）が幹事を務め、四月十七日に七高講堂を会場として開催された。御真影を奉安している場所に高台を据えて「至聖先師孔夫子神位」と記した木主を置き、渡部董之介校長が祭文を読み上げ、多くの詩歌が献詠された。その後の記念講演会では、渡部校長の講演に続いて、服部宇之吉が招かれて「孔夫子と儒教」を講演している。併せて聖像や先哲遺墨など二五〇点余りを集めた展覧会も開催されている。服部は翌十八日にも東本願寺別院で「現代思潮に就て」を講演している。

新潟県長岡市では五月三日に大正記念長岡市立互尊文庫を会場として、第四回孔子祭典が開かれた。記念講演

会では服部宇之吉門下で、このころ朝鮮総督府で仕事をしていた高橋亨が「西洋思想と儒教」を講演している。和歌山県の県立田辺中学校では、五月二十一日に平松得一教諭が祭文を読み上げて追遠記念祭を行っている。

仙台でも孔子会が結成され、五月二十八日に旧藩校養賢堂に聖像を安置して第二高等学校教授で漢学者の滝川龜太郎が祭酒となって祭文を読んでいる。講演会では、東京高等師範の中山久四郎教授が「孔子の大なる所以」、東京帝大の服部宇之吉教授が講演に赴いている。

名古屋では、従来、佐藤牧山の門人が孔子祭典会を挙行してきたが、大正四年以来途絶していたため、名古屋孔子会を発足して、六月四日に名古屋武徳殿において開催し、講演会では服部宇之吉が「孔子の人格と学説」を講演している。

鳥取県では東伯郡教育会による孔子祭が八月三日に倉吉町の有親館で開かれ、東伯郡教育会長が祭文を読み、鳥取出身で東京高等師範教授の細田謙蔵（三島中洲門）が「孔子者果何人乎」と題した講演を行った。

二松学舎では十月八日に開かれたが、次に湯浅邦弘教授から詳細な解説があるように、懷徳堂でも同じく十月八日に孔子二千四百年の祭祀が行われている。その祭祀の方法については、懷徳堂の重建に尽くした西村天因に

よって懷徳堂の先哲に対する祭祀が明治四十四年以来行われていたから、それに準じた儀礼が執り行われたと考えられる。

次に香川県では香川県教育会の主催による孔夫子二千四百年祭が、十月十七日に香川県表誠館で開催され、松平頼寿教育会長が祭文を読み、東京帝大教授で東洋史学の市村瓊次郎が「環境より観たる儒教の変遷」を講演している。

同日、宮城県の米沢図書館では館長伊佐早謙が祭文を読み上げた。

湯島聖堂では十月二十九日の祭典・講演会・饗宴に加えて、二十八・二十九日に上野の日本美術協会列品館における先哲遺墨展覧会、三十日に南葵文庫を会場とした展示会と宮内省楽部による西洋管弦楽演奏会も開催され、大々的な催しが行われた。

新潟では、新潟斯文会が形成されて―斯文会は地方組織もいくつか作られている―、同会主催により十一月四日に白山神社社務所において行われ、また新潟師範学校講堂において地元出身の漢学者小柳司気太が「孔教と国民性」を、建部遯吾（東京帝大教授、社会学者）が「孔子対儒者」を講演している。

石川県では、十一月十二日には新たに組織された金沢

孔子祭典会的主催により金沢市公会堂において藩政時代に前田綱紀が木下順庵に作らせた木主を祀って、第四高等学校の武藤虎太校長が祭文を読み上げ、また服部宇之吉が「孔夫子の人格」を講演している。

鳥取市では国語漢文教師および有志による鳥取国語会が八月の東伯郡教育会の祭典に刺激を受けて孔子追遠記念祭を計画し、鳥取県教育会的主催により十一月十八日に鳥取師範学校講堂（旧藩校尚徳館跡地）に開催された。斯文会総務の服部宇之吉に講師派遣を依頼した結果、東京高等学校教授の児島猷吉郎が「孔子の集大成」を講演し、併せて旧藩士による懷旧談「旧藩尚徳館について」や当地先哲碩学の遺書遺品の陳列も行われた。

北海道では小樽と札幌と函館で各市および各市教育会的主催によって記念講演会が開催され、東京高師出身で東京商科大学予科教授の峯間信吉や東京帝大の宇野哲人教授が講演に赴いている。十一月十八日に小樽の庁立高等女学校講堂で卜部小樽高等商業教授と峯間・宇野が講演し、十九日には札幌に移動して札幌時計台を会場として峯間が「女子と小人の為に弁ず」を、宇野が「先秦の思想界に就いて」を講演し、宇野は翌二十日にも北海道帝国大学中央講堂でも「我国の将来に関する一考察」を講演した。更に二十日に峯間と宇野は小樽に戻って小樽

高等商業でも講演を行っている。二十一日には函館で講演会が開かれたようである。

栃木県の足利学校では、例年通り十一月二十三日に釈奠が挙行され、講演会では中村(中山)久四郎教授が「精神上の長生不老、孔夫子の偉大なる所以」を、吉田静致博士が「現代社会と人格生活」を講演している。

最後に、愛媛県では十一月二十六日に松山高等学校において孔子祭典会が挙行された。同会では祭典、講演会、展覧会、記念出版の事業を計画した。祭典では油比質松山高高等学校長が祭文を読み、また伊予史談会が調査して県下における儒道功勞者二四四人を選出しこれを従祀した。講演会では地元出身の加藤恒忠(拓川、太原観山三男)が「政治家としての孔子」を、服部宇之吉が「孔子の人格と学説」を講演している¹⁴。

以上のように十以上の道府県で各地の教育会などが主催して様々な施設で開催されており、講演会の講師に関しては斯文会が牽引的な役割を果たしていることが分かる。

2 二松学舎における孔子二千四百年記念式典

二松学舎での孔子二千四百年式典について更に詳しく紹介しよう。この頃の二松学舎には、大正天皇から二松

学舎に賜ったご下賜金によって建てられた恩賜講堂という木造の講堂があり、ここを会場として開催された。学祖三島中洲は三年前の大正八年に数え年九十歳で亡くなっており、この時には中洲の三男で二松学舎の学長を継承した三島復(一八七八—一九二四、東京帝大漢学科卒)が祭文を奉読し、洪沢栄一が訓諭をし、阪谷芳郎が「孔子二千四百年所感」を講演し、それから二松学舎出身で岡山出身でもあり東京高等師範学校教授であった児島献吉郎が「孔子の文学」を講演している。

洪沢の訓諭の趣旨を紹介すれば、「経済と道徳とは一致結合すべきものにして、道徳を離れたる経済なきと同時に、経済を離れたる道徳もまた存在せざるべし。ここをもつて老生は平生経済をもつて道徳に合せしめんと欲して論語と算盤を唱道し来たり」と言っている。よく知られた「論語と算盤」説である。確かに洪沢は『論語』を自ら処世の信条にした経済人であったが、広く一般社会に向かってこれを唱道するようになったのは洪沢が七十歳を過ぎた一九一〇年頃からのことである。

更に次のように言う。「道学者は皆、道徳と経済とを区別して取り扱ったようである。しかるに、三島中洲先生はさすがに卓識を備え、道徳経済合一論を道破せらる。老生の最も感服するところはここに存す」と。洪沢と三

島は明治十年前後からの交流が知られているが、初めから道徳と経済の合一について語り合ってきたわけではない。洪沢が七十歳を期に実業界の一線を退いた後、洪沢邸で「論語と算盤図」を目にした三島がこれに触発されて、持論の「義利合一論」を敷衍した一文「題論語算盤図賀洪沢男古稀」を起草し、それ以来意気投合したのであった。

洪沢も「道学者は道徳と経済を区別して取り扱う」と言っているように、三島の「義利合一論」は当時の道学者の間では評判が良くなかったが、三島と洪沢の間では意見の一致を見た。洪沢から見て、「論語の注釈や解説はいかほど多数にのぼるも、その要は道徳が政治経済、日用常行の間に実践躬行せらるることが孔夫子の御精神」であると言っている。古今人々に愛読されてきた『論語』には膨大な文献が残されており、洪沢は当時、女婿穂積陳重らの助力を得て論語諸本を集めた論語文庫を作ることに取り組んでいた。今日でも都立中央図書館に残されている青淵論語文庫¹⁵は、論語文献の最大のコレクションとして知られている。しかしその一方で、いくらか多くの解説があっても、要するに孔子が言っていることは、道徳が人の生活に役に立つものとして実用できているかどうか、政治経済、日用常行の間に実践躬行できて

いるかどうかが重要である、それこそが孔子の精神である、と洪沢は言うのである。「知行合一道徳経済二致なき孔夫子の大教旨を体得して世に処し社会に活動せんことを願ふのあまり、いささか愚見を述べ、孔子二千四百年祭の辞となす」と言って、洪沢はこの訓論を締めくくっている。

3 湯島聖堂における孔子二千四百年記念式典

次に湯島聖堂における孔子二千四百年祭について更に紹介しよう。後ほど湯浅教授から関連する映像の紹介（関東大震災に焼失後、一九三一年に湯島聖堂が再建された時の映像）があるが、二千四百年祭の時の湯島聖堂における孔子祭もかなり大規模な催事で、三人の皇族、閣僚が何人、それから台湾・朝鮮の両総督府から派遣されて台湾、朝鮮の儒者たちが儒式の服装をして列席した。かくて日本帝国主義の陣容をよく表現した式典となったと言える。

四年前に創設された財団法人斯文会にとって、孔子二千四百年祭は最初の大きな記念事業であったと言ってよい。文献的価値の高い『正平版論語』の複製や『日本儒学年表』の刊行、また大規模な記念展示を行うなどの関連行事もこのときに行われた。このことは日本漢学史上

においても注目すべき出来事である。

祝辞では、例えば加藤友三郎首相は、代読ではあるが、第一次大戦後の国民思想への影響について述べている。第一次大戦中にロシア革命、ドイツ革命など共産革命が世界中で起こる中で、これを防ぐための方策がこの頃大きな課題となり、儒教の価値をもう一度見直そうという動きが出てきたことが伺える。

水野鍊太郎内相は、斯文会に期待することとして、次の二点を挙げている。まず国内に向けては、東洋道徳と西洋文明を合わせた考え方がこれからは必要である。西洋文明を明治維新以来の日本は旺盛に摂取してきたが、これを東洋的な道徳をどのように擦り合わせてやっていくかがこれからの重要課題であり、その点で斯文会が果たすべき役割がある。もう一つには、朝鮮の風教にも裨益することが大きいこと。朝鮮では成均館のあとに経学院が作られて、湯島聖堂がこれと関係を持って、朝鮮の統治に役割を果たしたことが知られているが、水野内相の演説の中でも朝鮮における人々の教化に湯島聖堂や斯文会が役立ってもらいたいと述べている。

洪沢栄一は孔子二千四百年祭の時には斯文会の副会長という立場であったが、この時もやはり故三島中洲と意気投合した「論語と算盤」説について述べている。それ

から、『論語』の教えの真髄は「博く民に施して能く衆を救ふ⁽¹⁸⁾」という民衆救済にあると強調している。洪沢の年来の主張を述べたものと言える。

孔子二千四百年祭が行われたのは大正十一年のことであるが、翌年九月、関東大震災で幕府時代の遺構である湯島聖堂は焼失してしまう。この復興はなかなか捗らず、洪沢の歿後、昭和十年（一九三五）に漸く再建された。このことを考え合わせると、斯文会による孔子二千四百年祭は、古い器（幕府時代の湯島聖堂）に新しい中身が盛られた、近代漢学のあり方を象徴する出来事であったと見える。

近代漢学とは新しく近代日本の下に再編された儒教と言える。教育勅語（一八九〇年渙発）が戦前の教育の指針として発布され、儒教倫理（人間関係論）が教育の基礎に位置づけられる。それから戊申詔書（一九〇八年渙発）が日露戦後に発布されて、教育勅語の重要性が再確認されるとともに、更に教育勅語では配慮されなかった国際協調や経済発展といった視点が新たに付け加えられていった。

儒教の再編に関して卑近な例を挙げれば、江戸時代まで孔子の言葉であることを示す「子曰」の二字は「子のたまはく」（先生がおっしゃった）と読んでいたが、今

日の漢文訓読では「子いはく」（先生が言われた）と読むというわずかな違いが生じている。この漢文訓読の変化は、明治末に漢文訓読の基準¹⁹が作られて、そのなかで訓読の際の敬語は日本の皇室に関する場合を除いて用いないという原則が定められたからである。従来、中国の儒教的世界観を反映して、日本でも孔子は比類ない地位に置かれていたので、それに従って訓読語法でも「曰」は「のたまはく」「のとうまく」などといった敬語を用いて読まれていたが、右の規定ができたことにより明治末期以降は皇室に比して孔子をはじめ儒教の先哲はその地位が抑制された形で漢文訓読が行われようになる。

斯文会ができて数年後、大正末期には帝国議会における決議によって大東文化協会ができ、その学校施設として大東文化学院が作られている。この協会の目的及び事業に次のような言葉がある。「本邦固有の皇道及び国体に醇化せる儒教を趣旨として東洋文化に関する教育を施すことを目的とする」。日本帝国における教育内容として、日本固有の皇道・国体に醇化し合致した儒教というものに限定したうえで、儒教を教育のなかに取り込んでいくことが、ここで明確に謳われているのである。

明治、大正、昭和初期には先儒への贈位が盛んに行われている。正四位には明治十四の蒲生君平から大正十三

年の林鷲峰まで、合計二十九人が贈位されている。従四位には明治二十四年の飯田忠彦・大橋訥庵・藤森弘庵・間崎滄浪・松林飯山・松本奎堂から昭和三年の古賀穀堂まで、合計五十人が贈位されている。正五位には明治四十年の宮本茶村から昭和三年愛甲喜春・遠近次左衛門・加倉井淡路・河野鉄兜・古賀茶溪・関藤藤陰・瀧鶴台・中垣謙斎・原古処・人見鶴山・若林強斎まで合計五十七人が贈位されている。従五位には明治三十六年の芳野桜陰から昭和三年の土井賢牙・東条琴台・丸川松陰、五弓雪窓まで合計三十人が贈位されている。以上、総計して一六六人に上る先儒への贈位が行われているのである。

贈位は明治初期には幕末の勤皇家に対して贈られることが多かったが、大正期以降は勤皇思想に拘わらず、必ずしも勤皇の事蹟が確認されない場合にも、先儒への贈位が増加していった。かつての儒教的世界観の中にあった孔子廟内で孔子像を囲んで従祀されるべき存在であった儒者たちが、二十世紀初頭に行われた先哲への贈位という形を通して、天皇制国家の秩序の中に処遇され地位を定められていった。今や天皇の権威のもとに従祀されるようになったのである。

結語

積奠、孔子祭祀は中国において長い歴史を持ち、祭祀対象はその時々、儒学思潮を反映して変化していった。特に従祀される先聖先師は歴史上かなり変化し、明代には宋・元・明の学者まで従祀されるに至る。日本では湯島聖堂の例のように、宋学大儒が従祀されることはしばしば見られた。

積奠の儀礼は唐代に日本にもたらされたが、孔子の「文宣王」昇格にともない日本では積奠に天皇が行幸することは殆どなかった。祭祀方法、祭祀対象には日中の差も見られ、日本では犠牲を用いる積奠よりも積葉で行われることが多く、また聖像の様式や木主を用いる用いない等の点でも相違があった。

儒教教学が重んじられた江戸時代に積奠も広く全国的に普及するが、あくまで幕府や諸藩の公的な施設での祭祀が多く、例えば医家において神農を祀ったのに比べると儒家において孔子を祀ることは少なかつたように見える。

日本で行われてきた積奠として、最も由緒ある湯島聖堂における積奠は、幕府の文教政策と共に歩んできたが、

明治維新後は途絶してしまう。

日露戦争後に、儒教の宗教行事としての積奠ではなくて、日本における儒教の普及を孔子に感謝する「孔子祭典」という形で復活する。そして日本の先儒の従祀や贈位も盛んになる。

旧幕臣の意識を持つ渋沢栄一は幕府の遺構である湯島聖堂を維持存続することに熱意を持ち、湯島聖堂を国民の儒教教化の場とすることに取り組んだ。明治維新後十分に処遇されてこなかった幕府遺構を維持存続することが、社会の継続性、安定化の上で軽視できないと考えたのだと思う。

近代漢学には日本帝国主義のもとに再編された儒教教学の色彩が濃厚であることから、従来ネガティブなイメージが付きまといがちであった。しかしながら、これは近代思想史の事例研究として重要であり、今後更に明らかにすべきテーマは少なくない。

例えば、近代漢学と呼ばれる多様な動きの中でも、渋沢栄一の「道徳経済合一説」や三島中洲の「義利合一論」のように、かつては古臭く見えたものが今日のSDGs（持続可能な開発目標）の視点から読みなおすとよく理解できるし、新たな魅力が見出せるように報告者は感じている。渋沢・三島の例が示すように、ネガティブなイメージ

ジに覆われた近代漢学の中から、新たな視点を通してす
くい上げ見直すべき余地は大いにあると思われる。

注

(1) 亜聖顔回を公に、九哲(閔子騫・冉伯牛・仲弓・宰我・子貢・冉有・子路・子游・子夏)を侯に、曾参以下七十三人を伯爵に封じた。

(2) 『続日本紀』宝龜六年十月、真備薨伝。

(3) 吉備真備の一回目の入唐は七一七年(靈龜三＝養老元)で、十八年後の七三五年(天平七)に帰朝。この時に真備が持ち帰った礼は「唐礼一百卅卷」(『続日本紀』天平七年四月二十六日条)とあるから、制定後間もない「開元礼」百五十巻ではなく顕慶三年(六五二)に成立した「永徽五礼」(顕慶礼)百三十巻のことであり、この礼によって後に積奠が整備された(天平二十年八月五日条)。真備二回目の入唐は七五二年(天平勝宝四)に出発し七五四年(同六)に帰朝、この時に新たに「開元礼」を持ち帰ったと考えられ、神護景雲年間の積奠整備においては開元礼が参照された可能性が高い(大隅清陽『律令官制と礼秩序の研究』吉川弘文館、二〇一一年)。

(4) 須藤敏夫『近世日本積奠の研究』(思文閣出版、二〇〇一年)序章による。

(5) この挿図自体は、用箋の柱刻に「書籍館」とあることから明

治初期の作製されたものと考えられるが、熊本大学附属図書館本にも同じ挿図が見られることから、犬塚が著述した寛政年間に何らかの資料に基づいて作画したものと考えられる。

(6) 『国史館日録』第三、寛文八年四月初日条(『史料纂集』一一六、七六頁)。

(7) 『昌平坂積奠記寛政十二年仲秋』二松学舎大学東アジア學術総合研究所蔵。「積奠儀注」と絵図七葉が含まれている。

(8) 『日本漢文学研究』(二松学舎大学・日本漢学研究センター発行)に翻刻を連載中。当該の寛政五年以降の記事は、同誌一三号(二〇〇八年)所収分に含まれる。

(9) 伊藤たまき「湯島聖堂の孔子像」(『草創期の湯島聖堂』斯文会、二〇〇七年)。

(10) 『東京帝国大学五十年史』等を参照のこと。

(11) 『大学行幸取調文書』二(松学舎大学所蔵)。

(12) 『斯文』第四編第六号(一九二二年十二月刊)孔子祭典号の「各地祭典記事」による。

(13) 西村天因は明治四四年一〇月五日に中之島公会堂を会場として懷徳堂先哲の祭典を挙行了した。東大古典講習科の同窓で東洋史学者の市村瓊次郎に祭典の記念講演を依頼する書簡の中で、西村は「祭典之儀ハ積奠を参酌し、講經論議之故例に倣ひて六日七日の両日ハ講演会開催之筈」「及門諸老十人許献撤之役目にて、儒式とは乍申損益不少、今古参酌に御座候」

（市村瓚次郎宛、西村天四書簡、一九一一年八月一日付、二松学舎大学東アジア学術総合研究所蔵）と述べており、釈奠をベースにしつつ懷德堂旧門人たちに献饌・撤饌などの担当を分担するなどのアレンジを加えたことが分かる。

（14）一九二二年に、服部宇之吉は本稿に挙げたように少なくとも五回、全国各地で孔子二千四百年の記念講演を行っている。

（15）「孔子二千四百年祭に就て」、「二松学報」六号、大正一一年一二月刊。

（16）並木栗水や楠本碩水は、三島中洲「義利合一論」への論駁を残している。

（17）大正十一年の孔子歿後二千四百年に当たり、「論語文庫」の開設を思い立った洪沢は、女婿穂積陳重に『論語』関係文献の収集を委嘱したが、その収書は関東大震災で灰燼に帰してしまう。その後、有志者の寄贈によって「論語文庫」が再び作られ、洪沢邸内の晩香廬に収められた。洪沢は自著『論語と算盤』や斯文会刊『国訳論語』などの啓蒙書のほか、林泰輔『論語年譜』などの学術書の刊行や貴重書の複製も支援した。

（18）洪沢栄一は二松学舎出版会から刊行した『論語講義』の扉に、この『論語』雍也篇の言葉を揮毫して掲げている。

（19）服部宇之吉「漢文教授ニ関スル調査報告」（官報八六三〇号）。